

ある心理臨床家のつぶやき

——ひとりびとりを問いかける——

学校長 村上英治

昨年、ご存じのように国際障害者年でした。このところ約30年間、障害者の問題に、それこそ心身障害、情緒障害、精神障害そのいずれの面をも含めて、かわりつつけてきた私にとって、忘れられない年として焼きつけられていくことでありましょう。

「完全参加と平等」それが謳い文句のスローガンでもありました。障害児者が、ごくあたりまえに健常の世界の中で受けとめられ、受けいれられていくことを夢みてきた私にとって、この理念をまったく当然のこととしたのです。でもこれがたとえ理想としてどのように高々と謳いあげられようとも、また概念的には一応了解の水準に達したとしても、私たちの日常生活の中でごくあたり前のこととして侵透していくようになることは、なかなかむづかしいものであることを身にしみ感じてきておりました。

長い間にわたって、国際連合で総会のたびごとに検討され、ようやく陽の目を浴びることになったこの国際障害者年は、ただ昨1981年その年だけ、ちょうど花火の打ち上げとして象徴され、そしてそのままはかなく消え去るものであってはならないことを明確に位置づけているのです。これから先向こう10年間にわたって、この年策定された具体的施策が、どのように具現されていくことができるのか、それを今試されているというよいのでしょうか。

障害者年、その幕は降りたのではないのです。これから10年先をめざしてその第1歩を踏み出すべき、スタートラインに今ついたということなのです。

執拗なまでこのことを銘記しておきたいと思います。今年1982年、附属学校で初めての車椅子の生徒を受け入れるようになったこと、これはまたきわめて意味深いことでもあるのです。今まで何の経験も、従って当然また何らの設備もなかったこの学校が、こうした生徒を受け入れることに決断した背後には、何といたっても、社会自体に、そうした思潮を支える基盤が熟成されてきていることを、私は認めずにはいられません。

もちろん、そういう子たちにはそういう子たちを受け入れる用意のある、そういう子たちだけの集団を作っている学校へ送りこんでやるのが、ほんとうにこの子たちにとって幸せでもあるのだという従来の観方があることは否めません。そしてそれはそれなりに決

して間違いではないのです。ひとりびとりを大切にす、そのためにこうした障害をもつ子どもたちにみあった教育の場を提供することが必要だという視点に立っての上のことです。単に隔離・分断といった考え方からではなく、ほんとうにそれらの子どもたちを十二分に生かしていくためにといった、真の個性尊重の教育に立ってというこの発想は、一見たしかに十分尊重されるべきものでありましょう。

しかしまだ、どこかひっかかるのです。障害のいかんにかかわらず、障害をもつ人は、人間としての価値という点からみて、どうしてもやはりオチコボレであり、それ故にこそ、人道主義の立場に立つとき、そのような人たちを健常者との競争社会においておしつぶしてしまうのはあまりにも可哀そうで、温室の配慮といってもよい、特別な処遇をすすめられる場において教育指導を行っていくことこそが望ましいとする、どちらかといえば慈善的恵与を上から賦与していくといった発想が、そのまた前提となっていることを、私自身正直いって否定できないからでもあります。そこには基本的に人間を、外在的・相対的・実利的観点からの価値体系に準拠して、類型化し、差別化し、序列化する思想が、どうしてもその根底に内在していることを、また改めて確認させられるのです。

健常者のみで人間社会は形づくられているわけではありません。そしてまた、どのような障害になおとも、それはあくまでも人間における個人差の問題であって、人間が人間であるということ、それぞれの人間が自分自身に賦与された可能性を精一杯実現していくべくよびもとめをうけた存在として、この世に生を享けたものであるということにはかわりはないのです。人は誰しもその独自の一回限りの、かけがえのない生命を生きぬこうとしているという意味において、その内在的・絶対的・本質的な価値が、高らかに讃えられるべきものなのでありましょう。基調となる人間観をこのようにおさえていくことによって、はじめて平等の地平に立つ人間存在の、その個別差が改めて問題にされ、検討されることになってくるように私には思われます。「完全参加と平等」の理念を、この視点に立って明確にとらえなおし、私どもの学校での車椅子受け入れも、この延長線に位置づけたいと考えるのです。

心理学を学んでここに30数年、以上のような観点に立って私は、人間普遍の平均的なすがたを解明することよりも、それこそひとりびとりの人間のなまなましい生きかたに眼を向けていくことが、心理学徒としての本来的な使命ではないかと、今思うようになっております。

人間行動の普遍の法則を明らかにし、それにもとづいてさらなる人間行動の予測を察知すること、ヴント以来100年の心理学の伝統的な主流は、あまりにもそれのみを追い求めつづけてきたきらいはないでしょうか。それもまた人間へのひとつの接近法であることに違いはありません。しかし心理学の研究者として、もっともっと追究しなければならない主題は、今私どもの眼前にあるひとりの人の行動であり、心でなければならぬのではないかと、臨床領域での実践を通して、私は切実にまた思うのです。

附属中学校・高等学校に、この年4月から職を奉ずることになりました。そこには今660名の生徒たちがいます。中学1年から高校3年まで、その発達差はたしかに大きなものがあります。そうした中で中学1年生は中学1年生なりの、高校3年生は高校3年生なりの、平均的発達段階を歩みつづけているのです。

でもその中でのひとりびとりの生徒としての、中学1年のアキオとヤスシの違い、高校3年のユカリとヤスエの違い、それをこの種の平均的・統計的水準から規定される逸脱値からのみで測ろうとすることが、果たして妥当なのでしょうか。

アキオはアキオ、ヤスシはヤスシ、そしてユカリはユカリ、ヤスエはヤスエとして、中学1年の世界を、高校3年の世界を、他の何びとのそれとも違う、まさしく自分自身の個有の生として、その拡がりや深まりを模索しながら歩みつづけていこうとしている、そうした独自の動きそのものこそが、私にとってはきわめて重要で、意義深いことのように思われます。

中学1年男子の平均規準から、アキオやヤスシがどれだけの偏倚をもって位置づけられるのか、また同様高校3年女子のガウス曲線のどのあたりにユカリやヤスエが位置づけられるのか、これはほんとうに個としての、アキオやヤスシ、ユカリやヤスエを理解する上に、決定的に意味づけをもつことにはならないようなのです。

附属学校は、中等教育段階での教育をごく一般的な形でおしすすめていくと共に、研究を行う場であることの要請を受けています。ここ30年近く、名古屋大学附属中・高等学校紀要に毎年示されてきた研究成果は、この要請にこたえる附属学校教官諸氏の、教育に対する情熱と、研究への鋭意の努力の集結ともいえるでしょう。

そしてその結果、多くの成果と知見がもたらされてきていることをも認めるにやぶさかではありません。でもしかしとここでもまた私は、ちょっと立ちどまって考えてみたいのです。

素朴な印象ではありますが、今までまとめられてきた研究の方向性は、どちらかといえば、こうした集団の平均値をになって、ある傾向やら、何らかの法則やらを見出ししていこうとする、科学方法論的について nomothetic (法則定立的) な視点に重点がおかれすぎてきたきらいはないでしょうか。中学1年生一般は示されます。高校3年生も平均化されてまいります。しかしアキオやヤスシはいません。ユカリやヤスエはどこへ行ってしまったのでしょうか。みんなそれぞれ集団の中に埋没してしまって、その個性が見失われてしまったきらいはないでしょうか。いうなれば、科学方法論としての今ひとつのアプローチ、idiographic (個性記述的) といってもよい視点によって立つ研究の少なさが、ふっと私に疑念を抱かせるのです。

附属学校の研究紀要です。大学の研究紀要とは今少し違った面が浮かびあがっていてもいいのではないのでしょうか、素朴な思いが私の心をよぎるのです。教育現実のなまなましい、あるいはどろどろとした現場にとっぷりと身を浸らせて、きれいにすっきりとは片付きそうもない、教師と生徒のぶつかり合いといった具体的状況の中から生まれ出る、にじみ出る苦悩をよみとりたくも思います。すばらしい教育実践をとおしてわきおこる人間讃歌を聞きたくもあるのです。

おちこぼれたり、排除されたり、疎外されたり、あるいは精彩はなつた輝かしいひらめきをまた示したりもする、そうした、アキオやヤスシ、ユカリやヤスエがもっともっと出てきて欲しい。数量化され、類型化された人間の形骸だけでなく、もっと教育現実の中で生きている人間の血潮にふれてみたい。教育現場からの研究実績としては、このような事例研究的なアプローチからの積み重ねが今少しあってもよいのではないのでしょうか。

教科の枠組の中で、あるいはまた教科の枠組をこえてのすばらしい共同研究が、こうして長年にわたって蓄積されてきていること、そしてそれが教育現場での実践活動として、生徒諸君に十分還元されていっているであろうことを十分認めた上で、なお心理臨床家としての私はそっとひとりこのようにつぶやくのです。現実の教育状況の中で生きつづけているひとりびとりの人間の、その「生き生きと生きいきすかた」を、なまのまゝ誂いあげていきたいとの思いに駆られてのほかにありません。

(昭和57年7月5日)